

北海道言語研究会 研究例会報告

2015 年度の研究例会は以下の日程とプログラムで開催された。参加者諸氏の間で活発な議論が交わされた。

・12月例会(12月4日(金)14:00 - 17:00; 会場: 室蘭工業大学)

14:00 - 14:40

「渡島半島東岸部旧榎法華村の漁業方言語彙～西岸部せたな町との比較の視点から～」

橋本 邦彦(室蘭工業大学)

14:45 - 15:25

「アイスランド語文音調(イントネーション)に関する覚書き」

三村 竜之(室蘭工業大学)

15:30 - 16:10

「ポリネシア諸語の一般的小辞について」

塩谷 亨(室蘭工業大学)

16:15 - 17:00

「現代日本語における未然形」

佐々木 冠(札幌学院大学)

・3月例会(2016年3月7日(金)13:00～16:50; 会場: 室蘭工業大学)

13:00 - 13:40

「中和と聴覚特性:同定力と弁別力の検討」

松井 真雪(国立国語研究所 PD フェロー)

13:45 - 14:25

「複合語の意味構造とアクセント」

三村 竜之(室蘭工業大学)

14:30 - 15:10

「サモア語、タヒチ語、ハワイ語における強調辞について」

塩谷 亨(室蘭工業大学)

15:25 - 16:05

「イタリア語の進行形について-英語との対照的視点から-」

藤田 健(北海道大学)

16:10 - 16:50

「せたな方言の音声の特徴について」

島田 武(室蘭工業大学)

『北海道言語文化研究』投稿規程

1. 『北海道言語文化研究』への投稿は、資格を問わない。
2. 投稿内容は、未発表であり、かつ投稿時に、他の学会等への発表の応募または投稿を行っていないものに限る。
3. 原稿の応募は『WORD』で読める形式のファイル (docx ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイル、もしくは印刷したもの (1部)を提出する。
宛先:92hashimot@gmail.com
5. 原稿の書式は、スタイルシートに準拠させる。
<http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/index.html> を参照。
5. 本研究会による電子化による公開を、著者が本研究会誌に投稿した時点で許諾したものとする。<http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/journal.html>
6. 締切は各年度の 11 月 30 日とする。
7. 投稿された論文については、2 名の匿名査読者によって査読を行う。
8. 掲載の可否は編集委員会が決定する。
9. 著者による校正は原則として初校のみとする。訂正は誤植に限るものとし、内容の変更は認めない。
10. 印刷費は著者が実費を負担する (印刷費用によって変動あり)。
11. 稿料は払わない。

(2010年3月)

スタイルシート

- (1)使用言語:日本語もしくは英語。
- (2)原稿:『WORD』で読める形式のファイル (DOCX ファイル)と印刷時の体裁確認のための PDF ファイル、もしくは印刷したもの (1部)を提出する。送付時に、WORD のバージョンを編集委員に知らせる。スタイルシートのテンプレートおよびPDF化用のフリーソフトに関しては、本研究会の WEB ページを参照。(URL: <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/style/>)
- (3)余白(マージン):上端 30mm 下端 25mm 左端 25mm 右端 25mm。
- (4)行数:37 行。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (5)字数:全角 39 文字または半角 78 文字。ただし余白を遵守すれば、多少の増減は許容される。
- (6)フォント:和文は MS 明朝、MS P 明朝、英文は Times New Roman のみを認める。特殊文字を使用する際には、unicode を用いることとし、その旨について投稿時に編集委員まで申し出る。
- (7)ポイント数および書体 :

| | | | |
|--------|-----------|------------------|------|
| 題名: | 18 ポイント | 太字 | 中央寄せ |
| 氏名: | 14 ポイント | 太字 | 中央寄せ |
| 要旨: | 9 ポイント | 「要旨」という文字のみ太字 | |
| キーワード: | 10.5 ポイント | 「キーワード」という文字のみ太字 | |
| 本文: | 10.5 ポイント | | |
| セクション: | 10.5 ポイント | セクション番号と題は太字 | |
| 謝辞: | 9 ポイント | 「謝辞」という文字のみ太字 | |
| 注: | 9 ポイント | 「注」という文字のみ太字 | |
| 参考文献: | 9 ポイント | 「参考文献」という文字のみ太字 | |
- (8)タイトルおよび氏名:和文と欧文の2種類で書く。本文と同じ言語を先にする。和文の姓と名の間には全角の空白を 1 つ入れる。欧文の氏名は姓をすべて大文字にする (例:John BINTLET)。和文と欧文それぞれの間に 1 行の空白を入れる。
- (9)ページ数:原則として図表を含め、20 ページ以内とする。
- (10)要旨:日本語でも英語でも可。場所はタイトルの下に 1 行空白を入れた後。分量は日本語の場合 400 字以内、英語の場合は 200 語以内。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)、両端揃えにする。
- (11)キーワード:5 つ程度のキーワードを要旨の下に 1 行あけて書く。左右のインデントは全角 2 文字(半角 4 文字)。
- (12)セクション (節):セクションの番号は 1 から始める。セクションおよびサブセクションの番号の形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。
- (13)段落:両端揃えにすること。段落の最初の文字の下げ方等の形式は問わないが一貫した書

き方になっていること。

(14)注:通し番号をつけて脚注もしくは後注とする。通し番号の形式に指定はないが、一貫していることと、番号が行頭に来ないようにすること。ただし過去における研究発表情報等はタイトルの後ろに*(半角アスタリスク)を付加し、注の先頭で言及する。

(15)参考文献:文献は本文の後ろ、後注がある場合には注の後ろに付加する。形式は問わないが、一貫した書き方になっていること。

(16)執筆者紹介:①氏名、②所属機関・部署、③メールアドレス、④URI、⑤電話番号等を論文末に付加する。①は必須。②以降は任意で、その他の事項も付け加えることができる。現在の所属機関がない場合には、元～でも可。

(2016年2月23日改定)

雑誌の作り方*

----- 1行あける-----
ジョン ビントレット (邦文)
----- 1行あける-----

How to Make a Journal

----- 1行あける-----
John BINTLET
----- 1行あける-----

要旨：本稿では、雑誌の作り方について

----- 1行あける-----

キーワード：雑誌 校正

----- 1行あける-----

1. (セクションの題)

本文はこちらから

1.1. (サブセクションの題)

----- 1行あける-----

2. (セクションの題)

----- 1行あける-----

謝辞

*

----- 1行あける-----

注 (脚注でも可)

1

----- 1行あける-----

参考文献

----- 1行あける-----

執筆者紹介

氏名：

所属：

Email :

注意 :

ヘッダーは偶数ページと奇数ページで設定が異なります。

テンプレートをダウンロードして使用する際には、既に打ち込んである文字を一文字残して入力してください。そうすると元の書式にしたがって、入力されます。全ての文字を消してしまうと、書式が異なってしまいますのでご注意ください。

例 :

1. 雑誌の出版形態

本文はこちらから

1. 雑誌の出版形態

本現在のところ雑誌の出版の形態には、何種類...

1. 雑誌の出版形態

現在のところ雑誌の出版の形態には、何種類...

セクションの本文を打つときには、「本」という文字を残して、その後から入力を始めます。その後「本」という漢字を削除してください。一文字でも入力すれば削除可能です。

How to Make a Journal*

----- 1行あける-----

John BINTLET

----- One line inserted -----

雑誌の作り方

----- One line inserted -----

ジョン ビントレット

----- One line inserted -----

Abstract :

-----One line inserted-----

Key words :

----- One line inserted -----

1. (Section Title)

1.2. (Subsection Title)

----- One line inserted -----

2. (Section Title)

----- One line inserted -----

NOTES (or foot notes available)

(*)

(1)

----- One line inserted -----

REFERENCES

----- One line inserted -----

Author's Information: (Name is required; the others optional.)

Name: John Bintlet

Faculty, Institute or Company: Muroran Institute of Technology

Email: jbintlet @mm.muroran-it.ac.jp

注意：

ヘッダーは偶数ページと奇数ページで設定が異なります。

テンプレートをダウンロードして使用する際には、既に打ち込んである文字を一文字残して入力してください。そうすると元の書式にしたがって、入力されます。全ての文字を消してしまうと、書式が異なってしまいますのでご注意ください。

例：

1. 雑誌の出版形態

本文はこちらから

1. 雑誌の出版形態

本現在のところ雑誌の出版の形態には、何種類...

1. 雑誌の出版形態

現在のところ雑誌の出版の形態には、何種類...

セクションの本文を打つときには、「本」という文字を残して、その後から入力を始めます。その後「本」という漢字を削除してください。一文字でも入力すれば削除可能です。

編集後記

話しは少し古くなるが、1989年10月から1990年7月にかけて、在外研究員としてアメリカのインディアナ大学に滞在していた。ベルリンの壁の崩壊、モンゴルの民主化、開高健の逝去のあった時期である。この大学にはアルタイ学部があって、トルコやウズベキスタン、モンゴルなどの歴史、文化、言語が研究されている。モンゴル語に関して言えば、モンゴル人のゴンボジャブ・ハンギン先生が中心となって、文法書、文献資料集、辞書などを刊行し、若手の研究者を育て、世界のモンゴル語学を牽引していた。ウラル・アルタイシリーズとして編まれた研究書は、1960年から1990年に至るまで、実に150巻出版されているが、ここでも先生は大きな役割を演じていた。私がいた当時、すでにハンギン先生は他界されていたが、モンゴル人民共和国からイシドルジ先生が来られて、学生の指導にあっていた。私は、月から金まで毎日この先生の研究室に通い、ウズベック語を研究するアメリカ人の女子学生とモンゴル語とモンゴルの歴史を学ぶアメリカ人の男子学生との3人で、50分間のモンゴル語の授業を受けていた。

さて、イシドルジ先生の真向かいにはチベット語の研究室があったのであるが、その扉に大きな横長の板がぶら下がっていた。その板に刻まれた文字に、私は心から同調した：“We will NOT be understood (私たちは理解されないだろう)”。モンゴル語であれチベット語であれ、それを熱心に学び、面白い楽しいと興奮しながら研究する者は、アメリカでも日本でも、一般の人たちには理解しがたい存在であることは、私自身十分に理解していたからである。

今は、グローバルの時代である。この時代の政治・経済・文化の標準はアメリカであり、学ぶべき言語は英語である。日本では、コミュニケーションの手段として英語を身に付けることが推奨され、小学5年生から英語科目が必修となるようである。大学でも、コミュニケーション、プレゼンテーションのための、あるいはTOEIC検定のための英語科目が花盛りとなっている。それに反比例するように、英文学、英語学は衰退の一途を辿っていて、モンゴル語だ、サモア語だ、アイスランド語だと叫ぼうものなら、あきれられて、なんと粹狂なという顔をされるだけである。昔から論じられてきたアカデミック教育における教養主義と実用主義の戦いは、とっくに勝敗の結果が出ているのである。しかし、それでも、いわゆる「役に立たない」学習には、思いもよらない出会いと発見が待っているかもしれず、「粹狂な」分野の研究には、尽きることのない知的な喜びと興奮が湧き出ることも真実なのだ。教養主義と実用主義のバランスこそが教育と研究を駆動させる肝心要の要素と言えるのではないだろうか。

北海道言語研究会 URL: <http://www3.muroran-it.ac.jp/hlc/index.html>

本研究会は談論風発のくだけた雰囲気の集まりで、言語に関するあらゆる分野に興味のある方に開かれています。皆様のご参加、ご発表、ご投稿を心よりお待ちしております。

『北海道言語文化研究』への投稿について

本誌に研究論文の投稿をご希望の方は、スタイルシートに則った原稿を下記宛にお送りください。締め切りは11月30日です(消印有効)。原稿受領後、編集委員が査読を行い、掲載の可否を決定します。発行後、本誌を数部(印刷費用によって変動します)進呈いたします。スタイルシートに則ったファイルをご希望の方は、本研究会WEBページからダウンロードできます。ご活用下さい。

研究発表について

本研究会では随時研究会を開催しています。研究発表をご希望の方は、下記宛に発表の題目と要旨をお送りください。持ち時間は発表40分質疑20分です。発表者は抄録を『北海道言語文化研究』に掲載することができます。開催日時に関しては、受付後、後日メーリングリストや本研究会WEBページでお知らせする予定です。

北海道言語文化研究 第14号

2016年3月31日発行

発行者:北海道言語研究会

連絡先:92hashimot@gmail.com

〒050-8585

北海道室蘭市水元町27-1

ひと文化系領域

北海道言語研究会事務局